

「優雅な暮らし」、そして「インテリというイメージ」——があたかも実現されているかのごとく語られているけれども、当の民衆自身は、「階級差が存在する限り」、この「幸福」の実現は「偽りであり続ける」ことをそれとなく感じ取っていた。この民衆の「幸福への想い」と同時にある「否定された願望像」が、民衆の憤激——ユダヤ人に対する嫌悪感——を呼び起こしたのであり、「悪しき平等主義」の正体である。

(3)「反ユダヤ主義」に内在する「宗教的敵意 (religiose Feindschaft)」

さらにホルクハイマーとアドルノは、反ユダヤ主義の内部には「ひそかに宗教的敵意が内在している」ことを指摘する。この敵意には「偶像禁止」をめぐる問題が関連している。すなわちキリスト教は、人間であるイエスを「神」としたことで、「偶像崇拜」を生み出してしまった。この「キリストを通じての神の人間化」こそ、「一切の誤謬の源泉」だと解釈している。このことにより、「キリスト教会は、とにかく教会の定めた教えに従えば、人々は救済への道を見出すだろうということを基にして成り立っているはずなのに」、この目標となる救いそのものの聖なる価値が「奪われてしまって」いるため、非真理であるに他ならないのである。つまり「反ユダヤ主義の宗教的起源」とは、「キリスト教よりもユダヤ教の方が優位にある」ことを感じていながらも、そのような意識を抑えつけて、「キリスト教を確実な所有物だと信じ込んだ」人々に内在するユダヤ人憎悪なのである。

改宗制度にみる

ユダヤ教のアイデンティティ定義

櫻井 丈

ユダヤ教研究においては、ミシュナー・タルムードをはじめとしたラビ文献及び第二神殿時代のユダヤ文献の文脈から「ユダヤ教」及び「ユダヤ・アイデンティティ」を問い直す学術的作業がここ十年でなされてきている。そこで一貫するアプローチは「ユダヤ教」を宗教現象としてのみ限定するのではなく、ひとつの出自、法規範、文化慣習を含んだ包括的なエスニック共同体として捉えるというものである。Shaye J. D. Cohenはその著作、*The Beginnings of Jewishness* において、地中海世界の思想的潮流であるヘレニズムとの邂逅を通して、西アジアにおけるパレスチナ地方に居住する血縁によって結びついた部族連合体である古代イスラエルとしてのエスニック・アイデンティティの枠組みが宗教慣習を含むユダヤ人 (Judean/777) のそれへと変化していったと指摘する。その枠組みの一つとは元来、集団の外部に位置する他者である異邦人が「改宗」という制度を通してユダヤ教共同体の成員として帰属するというものである。特に第二神殿時代において、ハスモン王朝下における周辺民族によるユダヤ教への集団改宗の事例などから、こうした他集団への帰属、同化は古代において顕著であることがわかってきており、何がしかの形で後代のラビ・ユダヤ教の改宗

第5部会

制度に少なからず影響を与えてきたと考えるのが妥当であろう。しかし Cohen の論点は、今後のユダヤ教理解に有益な視点を提示するものの、古代後期、特にギリシャ・ローマ時代におけるエスニシティ及びそのアイデンティティ形成の枠組みがどの程度まで定義できるのかという問題・視点を提起していない。

ユダヤ教研究と並行して、特筆すべきなのが J. M. Hall をはじめとする古代ギリシャ及びヘレニズム期におけるエスニック・アイデンティティ研究であり、ユダヤ教研究に有益な視点及び方法論を提供すると思われる。ヘレニズムという一つの普遍的思潮の文脈から、外部の人間による宗教・文化・慣習の受容を通して、特定のエスニック集団に帰属しその成員として自己規定していくというモデルは、ユダヤ教のアイデンティティ形成の枠組みを理解する上で重要な観点を提示するよう思えてならない。本発表ではユダヤ教のアイデンティティを考察するにあたり改宗制度に焦点を当て、ラビ・ユダヤ教共同体における改宗者の位置付けがラビ・ユダヤ教の人間観及びその自己規定を理解する上で重要なキートンであることを提起し、ラビ・ユダヤ教におけるアイデンティティを出自・文化慣習を含んだ包括的なエスニック・アイデンティティであるものと位置付け、その流動性及び相互浸透性を説明、定義するべく、Hall によるヘレニズム期におけるエスニック・アイデンティティ研究に依拠し、ラビ文献におけるユダヤ・アイデンティティ形成との比較検証を行う。具体的なラビ文献の検証にはパレスチナ・タルムード、ビクリーム篇1章…4、64a項を一次

資料として用い、主に農産物の初物の献上及び申命記26章…3節の聖句の祈禱を唱える規定において、他の共同体の成員と照らして合わせる形で、改宗者はどのような義務を課され共同体に帰属していくのかという議論を通して、改宗者はラビが想起、理解するであろう「イスラエル」というエスニック集団の範疇に含まれるのか否かという考察を試みることで、古代におけるエスニック・アイデンティティは流動的かつ浸透性を有する文化構築物であることを注意喚起するものである。

スピノザとユダヤ世俗主義

—— ヴァイレルのユダヤ神権政治より ——

平岡 光太郎

本発表では、現代イスラエルにおけるオピニオン・リーダー的存在のゲルシオン・ヴァイレル（一九九四没）の著作である『ユダヤ神権政治』において、『神学・政治論』がいかに読まれているかを考察し、これによって現代ユダヤ世俗主義のスピノザ受容の一端を明らかにすることを目的とする。ヴァイレルはテルアビブ大学哲学学科の教授だった。彼は、ハンガリーのユダヤ教育に熱心な家庭に生まれ、第二次世界大戦を通じ家族の全員を失い、その直後からユダヤ教の戒律を守る事を止めている。ヘブライ大学ユダヤ思想学科のゼエブ・ハーヴィーは、ヴァイレルを「熱心な世俗主義者」と評している。